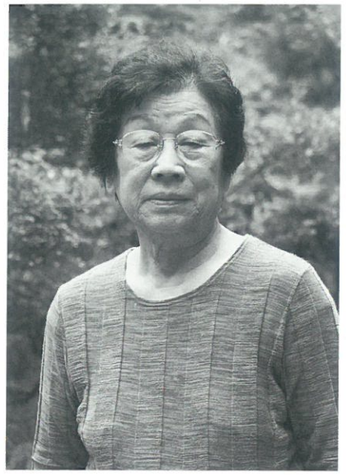
証言2

姉妹を失った悔しさ、山内病棟で胸を熱くした思いは忘れられない ―山内病棟で看護



谷口 文江さん（高茂町）

原爆投下の一週間前に庄原へ

昭和15年、尋常高等小学校を卒業し、口和から広島市へ出ました。個人病院で働きながら独学で看護婦の免許を取得。その後、姉のいる広島第一陸軍病院に勤務しました。現在の広島市民球場の位置にあり、後に原爆ドームとなる産業奨励館を毎日見ていました。陸軍病院は、戦場から帰って来た負傷兵を受け入れる施設で、日本が勝つためにと、一生懸命に看護に専念しました。

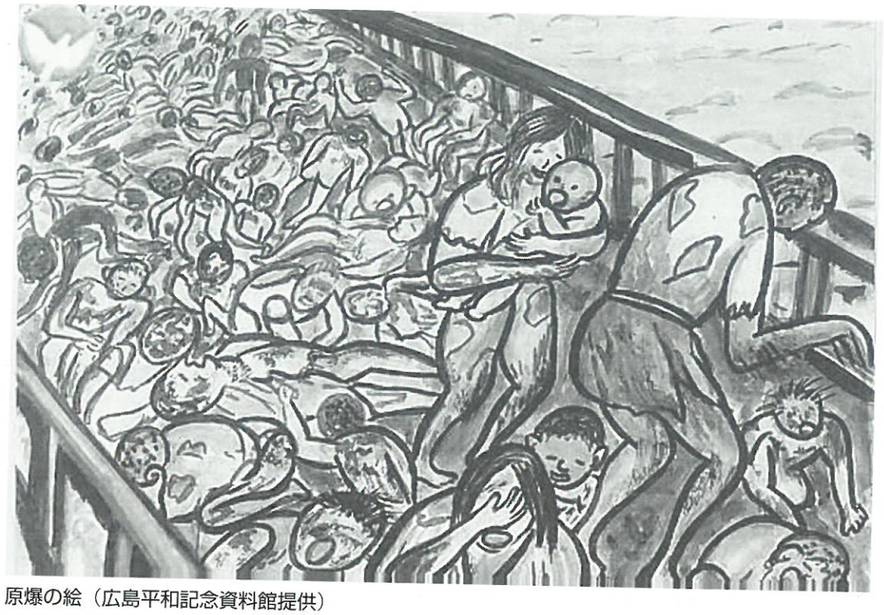
だんだんと戦争が激しくなり、陸軍病院も広島郊外に疎開をするよう命令がありました。庄原で患者を受け入れる準備をするため、昭和20年7月29日に庄原病院（現在の庄原赤十字病院）へ行きました。隣接する庄原小学校（現在の市民会館）にベッドを運ぶなど、受け入れ準備に汗を流していた8月6日、原子爆弾が投下されました。庄原病院から広島市方面を眺めると、黒い煙が見えたのを覚えています。

原爆の絵（広島平和記念資料館提供）

戸坂小へ救援に向かう

「ピカドンが落ちて大変じゃ。広島へ応援に行ってくれ」と命令を受け、8月8日にチームを編成し、戸坂小学校へ救援に向かいました。

戸坂駅に下りると、近くで死体を火葬していたのか異様な悪臭がしていました。



原爆の絵（広島平和記念資料館提供）

戸坂小学校に着くと、あまりにも悲惨な状況に頭が真っ白になりました。校庭の大きなテントには死体が積み重ねられ、周りは重症患者でいっぱいでした。その様子は口では表現できません。まるで地獄絵図に描かれたひどい状況でした。

陸軍病院で、両手足を切断した兵隊さんが水瓶（かめ）に入れられて帰ってくるなど、涙がでる悲惨な状況をたくさん見て来た私でしたが、声も出ませんでした。衣服はボロボロで裸同然、ヤケドがひどく、意識のある人は皆、「水」「水」と水を求めていました。ヤケドの患者に水を与えると、下痢を起こし危険な状態になるので、水は与えられません。看護といっても、薬もなく、ただ見回るだけで、手のほどこしようがありませんでした。この中に、市内で看護婦をしていた2人の姉妹がいるかもしれないと、大きな声で名前を呼びましたが、被爆者は皆、顔が腫れ「ウー」「ウー」と唸るだけで返答はありませんでした。

山内で昼夜なく看護

翌日、山内西国民学校が臨時病棟になるということで、被爆患者と一緒に庄原へ帰りました。2人の姉妹の安否が気になり、後ろ髪を引かれる思いで戸坂小学校を離れました。

山内病棟では、被爆患者の治療に一生懸命、昼夜なく看護に勤めました。しかし、その甲斐なく次々と亡くなっていかれ、残念な思いを何度となく味わいました。

重傷者を収容した1階では、背中にヤケドを負っている人が多く、皆うつ伏せの状態で横たわり、チンク油と赤チンを調合したものを、傷に塗りました。だんだんと乾燥してくると、その周りの皮膚を引っ張るので「痛い」「痛い」と叫ばれていました。また、暑かったので、傷口にウジがびっしりとわき、「痛い」と叫ばれる中で、ウジをとるのはつらい作業でした。脳障害を起こし、夜中に叫んだり、歩けない患者が無意識で徘徊したり、当分の間、仮眠をとることもできませんでした。山内地区の婦人会の皆さんは、炊き出しが主な作業でしたが、「被爆患者を看てあげたい」と、私たち看護婦と一緒になって看護に尽くされました。「汚い」とか「臭い」とか、愚痴をこぼさず手伝っていただき、本当に助かりました。

2階に収容された軽症患者も、突然髪が抜け、亡くなる人もいました。この頃から、ずっと気になっていた姉妹の生存をあきらめるようになりました。62年経った今も、何一つ姉妹の物はでてきていません。

姉妹を失った悔しさ、山内病棟で胸を熱くした思いは一生忘れることはできません。次の世代に二度とこんな思いを経験させてはいけないと強く願っています。